

一八八三年六月十五日(金)

ドツキネーシヨル
南神寺院における聖ラーマクリシュナと信者たち

ドツキネーシヨル
南神でのガンガー・ダシヤハラーの日、家住者の身分に関する話

〔ラカール、アダル、校長、ラカールの父、父の義父等〕

今日はガンガー・ダシヤハラー(十日祝い——ジョイスト白分十日目にガンガー女神を礼拝し、十の罪障を洗い流してもらう祭り)、ジョイスト白分十日目、金曜日で一八八三年六月十五日。信者たちは聖ラーマクリシュナにお会いするため南神村ドツキネーシヨルのカーリー神殿に來ている。アダルと校長は、ガンガー・ダシヤハラーのため休日であった。

ラカールの父親と、父親の義父しよとにあたる人物が來ていた。父親は二度目の結婚をしていた。義父はずっと以前からタクルの名前を聞き知っていた。大そう信心深い人で、タクルには是非お会いしたくて來たのである。タクルは食後、小寝台に坐っていらつしやる。そして、ラカールの父の義父を時々見ていらつしやる。信者たちはみな、床の敷物に坐っている。

義父「先生様、家住者の身分で、至聖かみをさとることができるといふことができますか？」

聖ラーマクリシュナ「アッハッハッハ、なぜ出来ない？ 泥魚みたいに暮らせばいい。あれは泥のなかに住んでいるが、体に泥がつかない。さもなければ、不貞な女のように暮らせばいい。あれは家事万端やっているが、心はいつも情夫のことを思っている。神様のことをいつも思いながら世間の仕事をしたいればいいんだよ。ただし、大変に難しいことだがね。わたしはブラフマ協会の人たちにこう言ったことがある——『部屋のなかにおいしい漬物の壺と水がめを置いて、そこへチフス患者を入れておく！ どうして治る見込みがあるかね？』漬物のことを考えただけでも口に唾ツバが湧いてくる。男にとって女は、さしずめ漬物の壺だ。世間のものごとへ灼けるような欲望——これが水がめだ。この欲望は際限きりがない。チフス患者はかめ一杯でも水が飲みたいと言うよ！ 大それた難しいことだがね。世間には色々様々な厄介ごとがある。こつちへ行けば熊手が落つこちてきてぶつかる。あつちへ行けば竹ぼうきにぶつかる。そつちへ行けば靴で蹴られる。とてもとても独りで暮らさぬことにや、至聖かみさまを想うことなんか出来やしない。金を溶かして飾り物をこしらえる場合に、溶かしている最中に何度も何度も呼ばれたら、満足な細工など出来つこないだろう？ 米を搗つかくにも、ひとりで坐つて搗かなければ——。何度も手にとつてみて、どれだけきれいになったか調べてみなければならぬ。搗つかいている最中に何度も何度も呼び出されたら、米搗きは出来ないだろう？」

〔方法——強力な離欲精神、昔の話——ガンガープラサードに診てもらおう〕
一人の信者「先生、ではいったいどうすればよろしいのですか？」

聖ラーマクリシユナ「そうさな。もし強い離欲の気持ちを起こすことができたなら、まあ、大丈夫だろ。間違いだとわかつたら、すぐ決心してその場で捨てることだ。わたしが前にひどい病気にかかったとき、ガンガーブラサード・セン(医者の名)のところへ連れて行かれた。ガンガーブラサードはこう言った。『スヴァアルナパトパテイ(煎じ薬の名)はとってもいいが、水を飲んではいけない。サクロの果汁なら飲んでいい』と。皆は、わたしが水を飲まずにどうやって生きていくのかと心配していた。わたしは固く決心したよ——もう水は絶対飲まない、と。パラマハンサ(偉大な白鳥)なんだ！ 私にはアヒルやガチョウじゃなくて水鳥の王様なんだ！ 上等の牛乳だけ飲んでいよう、とね。

独り静かな処で、しばらくの間暮らさなくてはいけないね。鬼ババに触りさえすればもうこつちのもの、何の恐れもないんだよ。自分が黄金になってから、何処でも暮らせればいいのだ。独り静かな処で信仰を獲むか至聖をさとるかした後でなら、世間で暮らしても何の差し支えもない。(ラカールのお父さんに向かつて) だからわたしは若い連中に、ここに泊まっていり、とよく言うんだよ。ここに何日かいれば、至聖さまが好きになるからね。そうすれば、世間でも難なく暮らせるからね」

〔罪と徳——世間病の特効薬はサンニヤーシン〕

一人の信者「神様があらゆることをなさるのでしたら、善と悪、罪と徳といったようなものはなぜあるのでしょうか？　すると、罪なこともあの御方の意志で起こるのですか？」

ラカールの父の義父「あの御方のご意思が、私共にどうして理解できますか？　ポーブも、神の

ことは誰にも分かりはしない」と言っていますよ」(訳註、ポープ—アレキサンダー・ポープ(1688～1744)。イギリスの詩人。この詩句は『The Universal Prayer』『普通の祈り』からの引用)

聖ラーマクリシュナ「罪や徳はあつても、あの御方自身は無関係だ。空気中にいい香りや嫌な臭いが漂っていても、空気そのものとは無関係だよ。あの御方の創造でこういうものがある。善と悪、真実と虚偽。——木のなかにはマンゴーの木もあるし、カンタル(ジャックフルーツ)の木もあるし、アムラ
 のなる木もあるようなものさ。悪人だつてちゃんと使い途があるよ。領地の小作人たちがどうしても言うことを聞かなくなると、その領地に乱暴者を差し向けなければならんこともある。そうやって領地を抑えておくこともあるさ」(訳註、アムラ—スモモのような果実で熟した実は食べられるが一般的ではない。実の大きさに比べて食べる部分が少ないので、見かけだけで実のない物、あまり役に立たない物の代名詞のようになっている)

再び、話は在家の生活のことにもどった。

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに向かつて) わかるかい? 世俗の生活をしていると無駄なことに心が使われる。そのためにクタビレ傷つく。それを元通りなおしてくれるのが出家生活だよ。最初の誕生は父親がくれる。二番目の誕生は聖糸^{ウパナヤナ}拝受のとき。又もういちど生まれ直すのが出家のときだ。^(原典註)女と金、この二つが障害物だよ。女への愛着が神の道に背を向けさせる。何が元で^{もと}落ちていく

(原典註) Except ye be born again ye can not enter into the Kingdom of Heaven: Christ. 『人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない』——ヨハネ福音書 3—3——

のか、男にはわからないらしいね。要塞(マイダーン公園)に行つたとき、坂道を下つてゐることがわつたしにや全然わからなかつた。要塞のなかに馬車が入つてから、やつとずい分低い処へきたことがわかつたよ。アハー、女は、男たちにそのことを判らせようとはしないのさ。キャプテン(ヴィッシュワナート・ウパッタエ氏)ときたらこう言うんだ。——『私の妻は智者でございます』と！ 幽鬼に取つつかれてゐるやつは、自分が幽鬼につかれてゐるつてことに気が付かない！ 『元気でやつてます』なんて言つてゐる！ (一同黙りこくつて聴いてゐる)

世間で恐いのは情欲ばかりかと言へば、そうじゃない。怒り々というのがある。欲の道に邪魔が入ると怒りだ

校長「テーブルの皿に猫が前足を伸ばして魚をさらつていくことがあるのですが、私は何も言えないのでございます」

聖ラーマクリシュナ「どうして！ 一つや二つ叩いてやつてもいいじゃないか！ 世間で暮らしている人は、シーツ、シーツぐらひは言わなけりゃ！ 毒液を出す必要はないがね。実際に誰かを傷つけるようなことはしてはいけないが、だが、敵の手を防ぐために怒るフリをして見せる必要はあるんだよ。そうでないと敵がやつてきてこちらを傷つける。しかし、ほんとの出家は、シーツと言ふ必要もない」

一人の信者「先生、すると、世俗の生活をしていて神をさとするのは、極端に困難なことのよう思われます。どれくらいのおっしゃるような暮らし方をしていますでしょうか？ 何処にゐることか！ 私は聞いたことはありません」

聖ラーマクリシュナ「どうして出来ないのかね？ 郷里くわにの方で大そう立派な判事代理がいて——プラタプ・シンという人だが、慈善もするし、瞑想もするし、神様を熱心に信仰しているし、とても徳のある人だ。わたしも招よばれていったことがあるが、こういう人もちゃんといるんだよ」

修行の必要——師の言葉を信じること——ヴィヤーサの信念

聖ラーマクリシュナ「修行が、なんといっても必要だ。それで覚れない筈はないと思うがね！ 正しい信念が持てるようになったら、もうそれほど修行することはない。グルの言葉を信じることだ！ ヴィヤーサデーヴァ様がヤムナー河を渡ろうとなさったとき、ゴーピーたちがそこに来合わせた。ゴーピーたちも河を渡りたいのだが、渡し舟が見当たらない。ゴーピーたちが、『タクル！ どういたしましようか』と言うと、ヴィヤーサデーヴァ様はおっしゃった。『いいとも、お前たちを渡してあげよう。だが、わたしは大そう腹が減っているんだが、何か持っているかね？』ゴーピーたちが、ミルク、クリーム、バターなど沢山持っていたので、それを全部食べてしまった。ゴーピーたちが、『タクル、渡る方はどうなるのですか？』と申し上げると、ヴィヤーサデーヴァ様はやおら岸辺に行つて突つ立ち、大声でおっしゃった。『オーイ、ヤムナーよ、もし私が何にも食べなかつたら、お前の水を二つに分けてくれ。そうすりゃ、我々はその間の道を通つて向こう岸に渡るから』言うか言わないうちに、水は二つに分かれてしまった。ゴーピーたちはびっくり仰天して思った——『あの人はたった今、こんなに沢山食べたのに、もし私が何も食べなかつたら、だつて？』

この固い固い信念だ。私じゃない、胸の奥なるナーラーヤナ、あの御方が食べたのだ。

シャンカラ大師アーチャリヤはブラフマンの智慧を得た人だ。それでも、はじめのうちは差別心もあったよ。あれほどヴィヤーサチンダーラの信念はなかったようだ。賤民が肉の塊を運んでいるところに、この方はガンガールの沐浴から上がってきて行き会った。賤民の体と自分の体が触れ合ってしまった。声を荒げて、『ゴラ、私に触れるとは何ごとだ！』すると賤民はこう言った。『タクール、お前さまもこの俺に触りはしない。俺もお前さまに触ったりはしない。純粹真我シュッドアートマは肉体ではない、五元素(地、水、火、風、空)ではない、二十四の存在原理でもないでしょうが』そのときにシャンカラは、ほんとうに智慧を獲たのだ。

ジャダバーラタはラフーガナ王パランキの駕籠をかきながら真我アートマの智識について話をしていたら、王は駕籠から降りてきて聞いた。『あんたは一体だれだ！』ジャダバーラタは答えた。『私ネーはあれでもない、これテでもない、純粹真我シュッドアートマだ』彼は、自分がシュッドアートマだということについて、完全に正確な信念を持っていたのだ』

〔タクール、聖ラーマクリシュナとヨーガの原理。智慧ジュニヤスのヨーガと信仰バクティのヨーガ〕

「私ネこそがそれである、私は純粹真我シュッドアートマである。——これが智者たちの意見だ。信仰者たちは、あらゆるものすべてカミに至聖カミの栄光であると言う。富と力を持っていてこそ、誰が見ても金持ちだということがわかるんだよ。だが、修道者の信仰の程度をご覧になって、あの御方おんみずから、『わたしはお前と一身同体なんだよ』とおっしゃって下さった場合は話が別だ。王様がお坐りになっている玉座に料

理人が上がりこんでいっしょに坐って、『王よ、お前と私は一身同体だ』などと云えば、人は気狂いだと言うだろうよ。だが料理人の忠勤を賞めて、ある日、王様が、『コレ、その方、朕の傍に坐れ。遠慮はいらぬ。そのほうと朕とは一身同体じゃ！』と仰せられたら、かれが王様といっしょに坐つても、ちつとも差し支えないわけだ。ただ、普通の人間が、『我はソレなり』というのがいけないのだ。波は水のものだが、水は波のものじゃないだろう？

要するに、どの道を行くにせよ、心が定まらなければヨーガは成功しない、ということだよ。心がヨーギーに支配されるんだ！ ヨーギーが心に支配されるんじゃない。

心が静かに定まると息も定まる——クムバカ（呼吸の抑止、ラージャ・ヨーガにおける呼吸法の一過程）になる。このクムバカは信仰のヨーガでもおこる。信仰によつて呼吸が静まってくるのだ。ニタイ、アマル、マタ、ハティ（私のニタイは狂った象）、ニタイ、アマル、マタ、ハティ、こう言っているうちに靈的な気分になつてきて、歌詞を全部発音できなくなつて、ただ、ハティ（象）、ハティ（象）だけになり、その後は、ハッだけになつて恍惚のうちに息は抑えられる——クムバカになるのだ。

ある人がほうきで庭を掃いているところへ誰かがきて、『ああ、たれそれはもういないよ、死んでしまったんだ！』と言う。掃いている人は、それが身内のものでなければそのままほうきを使いながら、『そうか、あの人も死んだか、いい人だったのになあ！』と思うだけ。これがもし、身内の者が死んだという知らせなら、ほうきを投げだして、『エーツ！』といつて坐りこんでしまう。この場合も息が静止してしまうのだ。ほかの仕事も手につかず、考えることもできない。女たちの間で見たこ

とないかね？ 誰か一人がビツクリして何かを見ていたり聞いていたりすると、ほかの女たちが、『あんな、そんなに思いつめて、まあ！』と言うのを——。この場合も息が静止して、物も言えずアーンと口をあけたままなのだ』

〔智者の特徴——修行による完成者と永遠の完成者〕

「我はソレなり(ソーハム)、我はソレなり(ソーハム)〴〵なんて言つてばかりいてもナンにもならない。智者には特徴があるんだよ。ナレンドラの目、突き出ているとても美しいだろう。ほら、この人の額と目にもいい特徴があるよ。

それから、皆が同じ境涯じゃないからね。人間には四種類あつて——縛られた魂、解脱しようとする力している魂、解脱した魂、も一つ、永遠に完全な魂だ。みんなが皆、修行しなければならんわけではないのだ。沢山の修行をして神をつかむ人もいるし、生まれたときから出来上がっている人もいる——プラフラータダのようにね。修行完成者と永遠完成者だ。ホーマ鳥は大空高くに棲んでいる。卵を産むと卵は空から落ち続ける。落ちていくうちに卵は孵つてヒナになる。何しろ高い高い処から落ちるのだから、落ちていくうちに羽が生え目が開く。地面に近づくころ若鳥は気がつく。地面に落ちたらずぐ死んでしまうと。そのとき、さっと母親のいる方に方向をかえて昇っていく。母さんは何処にいる！ 母さんは何処だ！

プラフラータたち永遠の完成者も修行や祈りをする。だが、修行する前から神をつかんでいるのだ。

実をつけてから花をひらくヒョウタンや南瓜カボチャのようにね。(ラカールの父を見つめながら)永遠完成者ニティヤ・シンプダは、身分の低い家に生まれて育つてもちゃんとそうなる。ほかのものには決してならないよ。豆は糞の上に落ちてても、ちゃんと豆の木になるよ!」

〔力の多様性とヴィディヤサーガル——ただの学識〕

「あの御方は、ある人には多く、ある人には少なく力をお与えになる。ある場所には灯明ランブのように光り、ある場所には松明クタイブのように燃え盛っている。ヴィディヤサーガルは一言で、自分の知性がどれだけのものかさらけ出したよ! 力の差異ちがいについて話をしたら、ヴィディヤサーガルはこう言った。『先生、では、神はある人には多く、ある人には少なく力をお与えになるのですか?』わたしはすぐさま答えた。『当たり前のこと。もし力に多少がなかったら、どうしてあなたはこんな有名なんだい? あなたの学識、あなたの慈善行為、その評判を聞いたからこそ、わたしはここまで会いにやってきたんだよ。あなたに角が二本生えるからじゃないんだ!』ヴィディヤサーガルはあれほどの学問と名声があつても、神は人によって力を多く与えたり少なく与えたりするのか、なんて子供じみたことを口走る。そら、網を引くとはじめに大きな魚がでてくる——鯉コイとか鱒マスとか。それから網のなかの泥を足で掻きまぜると雑魚ザコやドジョウなんかが出てきて、ちよいちよい見分けて、つかまえたり投げたり——。神様のことを知らないと、中からだんだんと雑魚ザコが出てくる。ただの学問だけじゃ何にもならないだろ?」